「慕う心」

今年も合宿中の監督の代理で、関根幸夫先生を囲む会　「幸風会」に参加させていただいた。

関根先生の９０歳をお祝いする年でもあり、華やかな会となった。そして参加者総数も、なんと９０名、いうまでもなく春高陸上部も創部９０周年という、おめでたいこと尽くしの年でもあった。

後藤均先輩が幸風会長としてお祝いを贈呈。

杉崎ＯＢ会長のあいさつ。
「いやぁ、野本君、楽にしなよ！すきなもの食っていいからね！」
いつものように気さくな大先輩である。
「箱根の覇者」であるのは今更いうまでもない。

そして幸風会副会長でもある小原先生からもお言葉。
我々にとっては背筋が伸びるお声だ。

関根先生が、教え子の古希（稀）祝いに、お言葉を贈る。

この優しさ、心配りが先生のお人柄をあらわしているといえるだろう。

春高同窓会長の荒木先輩は、越谷の同窓会に出席。
今日は同窓会事務局長として、
戸井田　哲先生がいらっしゃった。
私にとっても、教えを受けたなつかしい先生である。
柔道の達人だ。
今後、同窓会のお仕事で県内を休むまもなく飛びまわるという大役を担ってくださるのだ。

この会に参加させていただいて、感じることは多い。
正直、驚いている。歴史的にもすごい世代だなぁと痛感する。

広義にいえば、戦後の日本はこの大先輩達の世代が作ってくれたものだ。
埼玉の行政もそうだし、細かくいえばこのＯＢ会だって先輩達がしっかりとしたレールを引いてくれた。その安全な道を、ただ僕らは歩いているに過ぎない。障害となる悪路は、先人達が除いてくれたのでなんら危険はない。

では、この大先輩達が春高陸上部を９０年ささえる力の根源は何だろうか・・・・

私が思うに、それは「慕う心」であると・・。

インターハイでの強さ、実績もＯＢ会の結束力にはたしかに影響があるだろう。
プロのように、企業努力をし、試合に勝つことで名誉と利益をあげるのは、ひとつの極論でもあるだろう。高校スポーツでもそういう体制で知名度を高めるチームもある。球技ではことさら宣伝効果も高いだろう。

ただそれでは勢力は永遠には続かない。スター中学生をスカウトできない我が校は、必ず試合成績の浮き沈みが生じるのは自然の理だ。インターハイに多数出場する年も、県大会で敗退する年も必ずある。しかし、負けが続けば監督を解雇するようなプロ図式では、人の心は集まらない。出来高制度の恐怖政治、上下的軋轢では、とうていＯＢ会の「親睦」を図ることは不可能なのである。

そうなると互いの「敬う気持ち」「慕う心」が重要になる
我々ＯＢ会は、自らの意思で挑む高校スポーツの延長だ。

人生で一度しかない高校時代。
その１７、１８歳の少年の、
師を「慕う」気持ち。

師が教え子を愛し、生徒が師を慕う。そして先輩を敬う・・・・これこそが９０年、絶えることなく脈々と受け継がれる所以なのかなと思う。

だから試合結果は最優先項目ではない。現役が強いときも弱いときもある。そりゃあ強いほうがメディア的には盛り上がるだろう。
しかし、根底にある「慕う心」は、試合成績では影響を受けないのでＯＢ会はなんら変わらない。したがって世で一般的に見られる、監督の交代、試合成績などでＯＢ会は途切れたり離散しないのだ。

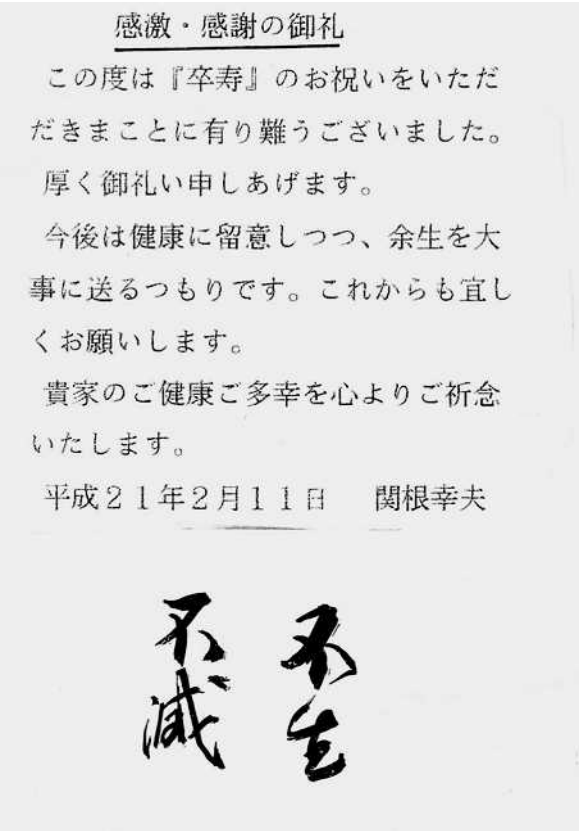
みな誰かに強いられてＯＢ会に来るのではない。師、先輩達を好きだから参加しているのだ。

７０歳、８０歳、そして９０歳の方々が、凛として談笑し合っている。
私らがこの年齢になったとき、このようにきちんとしたシニアになれているのだろうか・・・
穏やかで、明るく、楽しそうに・・・・・

正直な感想を言おう。

この大先輩達を目指すのは、私には「無理」だ。
敷居が高すぎる。
「環境、時代背景が異なるから・・・」という安易ないいわけしか思いつかない。
若手でも日々努力精進しているＯＢのみなさまは、是非　大先輩達を目標にして欲しい。
私には偉大なる大先輩方は、親の歳ほども離れているし、今後も私は「ダメな息子」でいいと思った。
高校時代の自分となんら変わらない。先輩に甘えて面倒をみてもらい、後輩たちと戯れながら過ごしてゆきたい。私はずっと、そうしてきた。

（ただ、あんまり大先輩方となれなれしい写真↑を撮り続けていると、いつか他ＯＢからお叱りを受けそうで最近緊張している　　筆　撮　のもと）



感激・感謝の御礼

この度は『卒寿』のお祝いをいただきまことに有り難うございました。
厚く御礼い申しあげます。
今後は健康に留意しつつ、余生を大事に送るつもりです。これからも宜しくお願いします。
貴家のご健康ご多幸を心よりご祈念いたします。
平成２１年２月１１日　関根幸夫

不滅　不生